

## 記憶に関する心理臨床的観点についての一考察

森田 健一

### 序 章

心理臨床家のもとを訪れる来談者（以下、クライアント）は、多くの場合、自身の過去を振り返りながら、現在における苦しい状態や未来に対する不安など、様々なことについて語る。言い換えれば、自身がこれまでに歩んできた人生における様々な経験を「投げ所」<sup>1</sup>にしながら（たとえそれが直接には語られなくとも）、それぞれの主訴を持って相談室へと訪れる。そして、過去について思いをはせるとき、それは決して「脳内に保存されている記録」を単に読み上げるような機械的な作業が行われているのではない。「今、この場」で想起される「記憶」に思いをはせ、そしてそれを心理臨床家の前で語るという、ダイナミックで「生きた体験」がそこでは行われている。

Freudの精神分析や、Adlerの個人心理学など、古典的精神療法と呼ばれる理論から、近年ではナラティブ・セラピーの理論まで、記憶をめぐる理論はこれまでもいくつか提唱されている。しかし、記憶という独特の現象についての研究は、心理臨床における理論の多さに比べたら、まだまだ少ないと言わざるを得ず、未だ検討される余地は多い。本論文は、そうした「記憶」に正面から光をあてて、心理臨床場面においてそれはどのような観点で扱われているのか、という問いを検討したい。具体的には、心理臨床的観点から生まれた理論を概観していきながら、これまでどのように記憶が捉えられてきたのかを検討していきたい。そして、これまでは着目されてこなかった観点からの試論を述べたい。

ここまで「記憶」とひとくくりに述べてきたが、記憶に関する研究は、主に認知心理学の分野において盛んにおこなわれているものであり、様々な側面に分節化して検討されている。本論文は、その中でも心理臨床場面で語られるような文脈での記憶、すなわち「自伝的記憶」<sup>2</sup>として認知心理学の分野で扱われている研究にも目を向けながら論じていきたい。

それにあたり、まず第1章では、一般に記憶がどのように扱われているか、という観点からアプローチをはじめ、そして、心理臨床において記憶が扱われる際には、どのような独自の観点が見られるのかを見ていきたい。

<sup>1</sup> 投げ所とは、「ある事の成り立つ根拠となる事柄（大辞林）」であり、一般的に使われているようなポジティブな意味のみをさしているわけではない。むしろ「縛られている」ように感じられることも少なくない。

<sup>2</sup> 自伝的記憶は、「個人が人生の中で体験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」と定義されている（佐藤ら、2006）。

## 第1章 「記録」としての過去、「記憶」としての過去

### (1) 「記録」としての過去

一般に、我々が過去を想起する際、まぎれもなく事実として起こったことを思い出している、と確信している場合がほとんどであろう。言い換えれば、想起された記憶は、過去に起こった客観的事実の記録を忠実に再生したものである、といったような観点で扱われることが日常場面ではほとんどであるといえる。たとえば、犯罪事件における事情聴取の場面においては、あたかもコンピューターのような正確性をもって過去のエピソードを想起することが求められる。そこでは、嘘やごまかしは当然認められないが、さらに、「記憶違い」や「想起内容の矛盾」についても同様に認められない。つまり、意識的であれ、無意識的であれ、一貫した記憶想起が求められる。

松島(2002)は、殺人事件の公判廷での検察官と被疑者とのやりとりを紹介し、その場面における検察官の態度について考察している。簡単に紹介すると、被疑者が問われている犯行動機について、過去の調書と法廷での発言との間で内容が食い違っており、その矛盾を検察官は執拗に追及している、という場面である。このとき、被疑者が弁明しようとするのを認めず、検察官は「記録されているかつての想起」を徹底して被疑者に確認をとろうと試みている。そうした検察官の態度について、松島は「対話の場である現在よりも、記録として残っている過去のほうを優先している」としている。

ここで挙げた例に典型的に表れているように、「記録」として過去を捉えるような場合では、想起された過去のエピソードは確定的な事実としての根拠をもつものであり、そこには修正という余地はありえないという前提が存在し、「静的なもの」として記憶が捉えられているといえる。

### (2) 「記憶」としての過去

一方で、件の公判において被疑者が弁明しようとしたように、発言した当の本人ですら何が事実なのかがわからなくなる、ということもありうるし、また、何の違和感もなく過去についての自己認識が変容する場合も多々みられる。目撃証言に関する一連の研究が証明しているように、「人間の記憶はきわめて曖昧で変容しやすく、出来事のシーンをビデオカメラで記録し再生することとは著しく異なっている(原、2006)」ものである。

このような観点を徹底した論理で付き詰めた一人として大森荘蔵が挙げられよう。大森(1996)によると、過去とはあくまで「制作」されたものであり、想起経験という、「『かつて』の知覚・行動の現在経験」による結果として定義されるものである、という。つまり、想起とは、ヒュームがいうような、過去の知覚が薄められ弱められた形で「再現」・「再生」することではなく、「海が青かった」・「犬が吠えた」のような「言葉に成り過去形の経験になること」であるという。ここで重要になるのは、過去という客観的事実が存在するのではなく、あくまで「私」が「現在経験」として「文意的」に、「物語的」に「制作」したものが結果的に「過去」として定位されている、という視点である。それゆえ、「想起される過去にあっては想起の誤りということがありえない」のである。

このように、過去の経験とは想起されてはじめて存在しうるものであり、客観的事実にその根

拠があるわけではない、とする観点もみられる。

### （３）心理臨床における「記憶」とは

前節でみてきたように、「記憶」とはそもそも客観的事実がそのままの形で保管されて想起されるものではなく、非常に曖昧で主観的なものである。それゆえ、想起する状況によって様々に変容するものである。そういった側面は、正確さや客観性といった観点からはネガティブなものとして捉えられるが（上記の事情聴取場面のように）、心理臨床場面では、記憶のそうした性質がむしろ重視されることが多い。たとえば、ナラティブ・セラピーのアプローチには、「記憶の可変性や即興性などの動的な側面こそが、心理療法の過程を左右しているという実践家の経験的知識」が背景にあると考えられている（野村、2008）。

このように、心理臨床場面では記憶について、修正の余地のない静的なものであるという観点よりも、「今、この場」で生み出される動的なものであるという観点の方が、むしろ重視されるといえるであろう。そして、それは「記録」のように、「正しい－間違い」という次元で評価されうるものとは異なった次元の性質であり、その記憶が想起されたということの意味を見出そうとされるものである。Adler(1929)は「回想が空想のものであるか、真実のものであるかは、問題になりません」と述べているが、このような観点は心理臨床独自のものといえるであろう。

つまり、心理臨床場面においては、記憶が主観的で曖昧であり変容されやすいことを積極的に認め、むしろそこにどのような意味があるのかを見出そうとするという、独特のスタンスが取られているといえる。

## 第２章 「記憶」として想起されるもの

*The stream of thought flows on; but most of its segments fall into the bottomless abyss of oblivion. Of some, no memory survives the instant of their passage. Of others, it is confined to a few moments, hours, or days. Others, again, leave vestiges which are indestructible, and by means of which they may be recalled as long as life endures. Can we explain these differences?*

— William James "The Principles of Psychology" より —

前章で見てきたように、記憶が扱われるときには、客観的事実に基づいた「記録」という視点と、主観的想起体験によって制作された「産物」という視点が存在する。そして、心理臨床場面では、日常場面の多くの場合とは異なり、後者のような視点での記憶、すなわち現在経験として想起された産物としての側面の意味を積極的に見出そうとされていることを述べた。

では、そのような主観的想起体験によって現在経験として想起されるものとはいったいどのようなものであろうか。本章の冒頭で引用したJamesの問いかけは、そうした記憶という産物の本質的な謎を端緒に提示しているといえる。特別に言わずとも、我々は日常様々な思考を行い、そして幾多もの経験の中で生きている。しかし、後に「記憶」として想起されるものは、その中のほんの一部にすぎない。たとえ前日の出来事であっても、すべての出来事が記憶として想起され

ることはない。また、想起された記憶であっても、それらの記憶内容同士には順序列のようなものも生じる（同時に全てが想起されるわけではなく、一つ（あるいは一塊）ずつ順番に想起されることが普通であるし、また、それぞれの内容の鮮明性にはたい違いがある）。さらに、幾年も完全に忘れ去られていた記憶が瞬時にして蘇ることもあれば、確信的に保持していた記憶の内容が誤りだったと自ら気付くこともあろう。なぜこのようなことが生じるのであろうか。

こうした問いは臨床場面でもしばしば生じてこよう。クライアントの語りにコミットしてゆくとき、「この記憶はいったいどういう意味なのだろう」、「どうしていつもこの記憶が語られるのだろう」といった問いが生じることや、いつもとは違う記憶が突然語り始められたときなどに素朴な疑問が浮かんでくることがしばしばある。

そこで本章では、いかなる要因によって、いかなる記憶が想起されるのであろうか、という観点から検討してみたい。それにあたってまず、認知心理学の分野で、自伝的記憶の想起に関する説として提唱されている「想起手がかり説」を手がかりに論じていきたい。

### （１）想起手がかり説

もし、「小学校の頃の出来事を一つ思い出してください」という教示が与えられれば、「小学校」というキーワードを手がかりとして自身の記憶を探り、たいていの場合、何らかのエピソードを想起することができる（たとえば、「修学旅行先のホテルでなかなか寝つけなかったこと」のように）。この場合では、「小学校」という手がかりが想起の要因として作用し、何らかのエピソードが記憶として想起された、というように説明することができよう。一方で、日常場面においては、必ずしもそのような手がかりが与えられずとも不意に記憶が想起されることがある。そのような想起を一般に「不随意想起」というが、そうした現象についてはどのように説明することができるのだろうか。

太田（1994）は、「何かを思い出す時には、どんな場合でも、何らかの手がかりが存在すると考えた方が、記憶のメカニズムの説明がつき、おそらく事実もそうであろう」とし、想起とは「検索手がかりと記憶痕跡の相互作用の結果である」とした。つまり、特に恣意性のない不随意想起場面においても、必ず何らかの手がかりがある、というのである。太田は、「記憶はすべて事象の記憶であり、ある時間的空間的な文脈の中で形成される」とし、「外的環境」と「内的環境（心や体の状態）」の双方が想起の手がかりとなるとしている。確かに、大学生を対象に不随意想起を収集したBerntsen(1996)も、想起された記憶と想起状況における共通性を挙げ、不随意想起において、何らかの想起手がかりが認められることを証明している。

こうした説からは、記憶を想起するときには、外的なものにせよ、気分や身体の状態のような内的なものにせよ、何らかの手がかりがそこにはあり、それと共通の因子をもつものが「記憶」として想起される、ということになる。

しかし、これでは、なぜ他でもなくその出来事が「記憶」として選ばれたのか、という問いの解決にはならない。上記の例でいうならば、「小学校の頃の出来事」はそれこそ6年分あるはずであり、記憶として選ばれたその出来事が手がかりと結びつく唯一のものではないことは明らかである（修学旅行である必然性はないし、修学旅行といっても様々なイベントがあったはずである）。つまり、想起手がかりと何らかの関連をもつエピソードはたいていの場合多数存在するはずなの

に、なぜそれが選ばれたのか、選ばれなければならなかったのか、という謎は依然残されたままである。もちろん、不随意想起の場合でも同様の疑問が残る。さらに、たとえ同じ手がかりであっても、想起される記憶がその時々によって異なることもある。

つまり、このような想起手がかり説の観点からの説明は、想起された記憶の意味をみていこうとする心理臨床の場面では、実際的ではないといえよう。それは、こうした説の中での記憶とは、太田が「記憶痕跡」という表現を用いているように、むしろ「記録」された過去が再生されたもの、というニュアンスが色濃いと考えられるからである。

## （２）なぜ他でもなくそれが「記憶」として選ばれたのか？

記憶に関する大きな謎、すなわち、「なぜその出来事が記憶として想起されたのか」という問いには、上記で紹介したような「手がかり説」からはなかなか接近しにくい。

それは、心理臨床場面においてクライアントが自身のみた夢を語るとき、その連想として、「きっと昼間に〜〜〜があったからだと思います」という事実を表明する次元と近いであろう。夢の内容と昼の出来事とを連関させる、そのクライアント自身の意味付け自体にはもちろん重要な意味があるが、唯一無二の夢内容そのものを見ていくときには、説明にはならない<sup>3</sup>。

しかし、そのような「なぜ？」という問いかけに対しては、事実と連関させる以外には説明ができないようなものである、ということも否めない。つまり、合理的に説明しようとすればするほど外的な要因に還元させる方向に傾いてしまわざるをえないものなのかもしれない。実証的観点から記憶を解明しようとするときには、現象を分節化し、まずは客観的な要因から探ろうとするようなアプローチの方向性は有用であろう（むしろその方向を突き詰めるのが実証的研究であろう）。しかし、心理臨床場面のように、それぞれの唯一でかけがえのない記憶を理解しようとする際には、この方法では限界がある。

では次に、心理臨床の分野から記憶理論を確立したFreudとAdlerが、そうした記憶をいかに捉えたかを簡潔に紹介して、この問題についてさらに論じてみたい。

### 1) Freudの説 (Freud, 1899およびFreud, 1901より筆者がまとめた)

Freudは「隠蔽記憶」という概念を提唱することで、想起された記憶、特に幼少期の記憶の意味についての説明を試みた。Freudは、幼少期の記憶として一般に想起される記憶のたいていは、取るに足らないような内容のものである、ということに注目する。そして、そのほとんどが観察者のように外側から自分自身を見つめる視点で想起されるという事実<sup>4</sup>を根拠にし、想起された記憶とは、無意識的欲動に彩られた重要な記憶（あるいは空想）を抑圧するために後に再構成されて作られたものであるとした。つまり、衝立(Screen)のようにその重要な記憶を隠すための隠蔽記憶である、としたのである。そして、最初に想起された記憶は、そこから連想を重ねることによって真に重要な記憶に至るためのきっかけにすぎない、としている。

<sup>3</sup> たとえば、昼に高校時代の親友と偶然再会し、その夜に「高校の文化祭の準備をしている」という夢を見たとする。昼間に会った高校時代の親友がその夢のきっかけになったかもしれないが、他でもなく「文化祭の準備」が夢に見られた必然性はない。

<sup>4</sup> Freudは調査研究による数量的検討をしたわけではないが、森田(2008a)の調査によると、確かに幼少期の記憶は外側から自身の姿を眺めるような視点で想起されることが有意に多かった。

これは、夢について、「顕在夢」と「潜在夢」に分けた理論とパラレルな構造をもつものといっ  
てよいであろう。つまり、実際に見られた顕在夢（≡最初に想起された記憶、すなわち隠蔽記憶）  
そのものに意味があるのではなく、そこから自由連想されることで行き着く潜在夢（≡真に重要  
な記憶）にこそ、重要な意味がある、という考えである。

Jung (1987) はこの自由連想という手法について、「誰かに自由連想の課題を与えると、なる  
ほどその人のコンプレックスが発見される。しかしこれらのコンプレックスが、出発点である夢  
にも含まれていたかどうかは分からない」として、夢には「適用できない」としているが、隠蔽  
記憶から自由連想をする、という理論についても、同様のことが言えるであろう。

このように、「他ではなくその記憶が最初に想起された」という特別な事実を追求しようとす  
るときには、この理論ではその特別な事実を無視しかねない。また、「なぜその記憶が隠蔽記憶  
として選ばれたのか」ということの説明は、Jungが顕在夢に関するFreudの説を批判している  
のと同様の観点から、完全なものとはいえないであろう。

## 2) Adlerの説 (Adler, 1929およびAdler, 1932より筆者がまとめた)

Adlerの提唱した理論の一つとして、「ライフスタイル」という概念がある。ライフスタイル  
とは、文字通り、各人が生きていく在り方といえるものであり、人は自身のライフスタイルに  
（無意識的に）基づいて、思考し行動する。そして治療とは、そのライフスタイルの歪みを修正  
していくプロセスである、と捉える。このとき、想起された記憶は、その人のライフスタイルを  
典型的に表す「Story of My Life」であると考えられる。つまり、想起時におけるその人のライ  
フスタイルを読み解く一つの手がかりとなるものが記憶である、という。特に、人生最初期の記憶  
はそれを典型的に表すものであるとされる。これを実証するために、初期記憶を所定の基準に基  
づいて分析した結果と、ビッグファイブ理論による性格検査の結果との関連をみた研究もあり、  
実際に関連がみられている (Manzoor & Rehman, 2003)。

これらは、Hester (2004) も指摘するように、ナラティブ・セラピーの観点と非常に近いであ  
ろう。想起された記憶とは、その人独自の在り方（ライフスタイル）によって構成されている物語  
であり、セラピーではそれを修正し、新たなストーリーを紡ぎだすことで変容を導こうとする。

このように、想起された記憶というのは、Adlerによればパーソナリティ（ライフスタイル）  
が投影されたものとして捉えられることで説明されるわけであるが、先の謎に答えたことになる  
であろうか。体験的に周知のように、実際に想起される記憶というのは、必ずしもそのように還  
元できるようなストーリーが含まれるとは限らないのが実態であろう。たとえば、ひたすら風景  
だけが広がっているような記憶が想起されることもあれば、ほんの印象のみが想起されることも  
ある。やはり、「すべての記憶」についてAdlerの説明が適用できる、とは思えない。

## 第3章 記憶想起という「体験」

前章では、数少ない中でも記憶に関する理論を確立しているFreudとAdlerの説について、記  
憶に関する1つの疑問の回答としての観点のみに焦点をあてて検討したところ、そのような還元  
的な説明としては、いずれも限界が見られた。

それにも関わらず、心理臨床的にはそれらの理論は実際に有用であり、今現在でも用いられ続け

ているという事実がある。それはなぜだろうか。心理臨床的観点から記憶を捉えるとき、「なぜそれが想起されたのか」という原因を探し出すことよりも、むしろ「その記憶がいかなる意味をもつのか」というパースペクティブとして理論が確立されているからだ、と筆者は考える。心理臨床場面において、クライアントが何らかの症状を訴えるとき、その原因を突き詰めることが最終の目的ではない。むしろ、それをいかにとらえ、それとどのように向き合っていくのか、というところが心理臨床における中心的な取り組みであり、そのための理論である。記憶についても、心理臨床的観点から捉える場合には、そのようなパースペクティブとして想起された意味を捉える視点が重要であろう。本章ではそうした視点から、彼らの理論をもとに、記憶がどのように生かされるのか、という点に着目してみていきたい。

### （１）記憶を体験するという次元

FreudとAdlerの理論は、方向性こそ違えども、「今、現在の体験として記憶が用いられた」というところに大きな意味があったのではないかと、と思われる。言い換えれば、「私」が能動的に「記憶を生きた」ということが、その治療の大きな枠として機能したのではないかと、と思われるのである。では、その「記憶を生きた」とはどのような体験なのか。

#### １）連想という体験

記憶想起の文脈でFreudの用いた自由連想という方法は、想起された記憶をスタート地点として、心に浮かんだ様々なことを徹底的に連想していくというプロセスであった。では、連想するというのはどのような体験なのだろうか。ここで、記憶の連想に関して検討した森田（2008a）の研究を紹介したい。

森田は、大学生を被験者に幼児期の記憶を想起させ、さらにそこから連想される記憶を想起させた。そして、それらの"想起視点"に着目したところ、最初に想起された記憶では、外側の視点（自分自身の姿を客観的にみるような視点）で想起される記憶が有意に多かったにもかかわらず、連想された記憶では、内側の視点（当時の自分自身の視点）から想起される記憶が有意に増加した、という結果が得られた。また、想起された視点によって、記憶内容の差異を検討した結果、外側の視点で想起された記憶は、想起主体にとって客観的な出来事のように感じられるのに対し、内側の視点で想起された記憶は、鮮明で、強い感情価を伴うことが示された。

この調査は、精神分析的状况で行った自由連想とは構造がまったく異なるため、安易に自由連想に還元することは出来ないが、記憶から連想をすることがどのような体験なのかについて考察することができよう。すなわち、幼児期の記憶について、一つの記憶のみを想起するときは、どちらかといえば客観的な次元からなされることが優勢であるが、その記憶から別の記憶に連想する際には、その記憶の世界にコミットし、いわば、その記憶自体の中に入っていくということが行われている（「自分自身の視点」になる）のではないだろうか。つまり、自身の内的な世界に没入し、入っていくような体験がなされたとはいえないだろうか。

#### ２）意味を問い直す体験

次に、自身のライフスタイルが投影されたものとして記憶が扱われ、その記憶を構成しなおすことに重心が置かれているAdlerの手法を手がかりに検討したい。

Adlerの手法では、想起された記憶は、現在の自分の状況を知り、未来を予測できうるものと

して用いられる。そして、その記憶に現れ出ている想起者のライフスタイルの型を分析し、修正することで、現在置かれている状況を改善することが目指されている。

ここで、Adler派によってまとめられた初期記憶を聴取する際のインタビュープロトコルを参照したい (Kopp & Eckstein, 2004)。それによると、クライアントが何らかの記憶を想起した後、まずは「劇を見ているかのように、自分が見ている情景を報告」させる。そして、その情景の中で最も鮮明な瞬間を、スナップ写真のように切り取らせ、その瞬間にどのように感じていたのか、そして、なぜそのように感じたのかを説明させる。次に、もし記憶を変えることができるのなら、どのように変更するかを、詳細に報告させる。変更した後、その世界では自分はどのように感じるのか、その理由はなぜかを推測させる。最後に、オリジナルの初期記憶と現在クライアントが置かれている状況を比較させ、さらに変更された記憶と現在の状況を比較させる。そして、記憶を変更したことではなにか得られたことがないかを尋ねたのち、適宜セラピストが解釈を行う。

Koppらも述べているように、ここで記憶として現れてきた世界は、想起者の人生状況を表すメタファーとして扱われている。直接的に今現在の状況を改善することが難しいクライアントであっても、劇のように脚本を修正するようなスタンスならば、その世界を改善することは可能である。そうしたイメージの次元においてシミュレートした後で、実際の状況場面に適応させようとするわけである。

Adler派の手法は、解決志向アプローチの先駆けといわれることがあるが<sup>5</sup>、クライアントの状態を具体的に変化させるための一つの戦略として、記憶が用いられているといえるであろう。すなわち、主体としての「私」が、記憶を通して自身のおかれている状況を把握し、改善することが目指されている。それゆえ、記憶をいかに操作できるかが重視されているといえよう。

## (2) 記憶が生きるという体験

前節でみてきたことは、意識的にせよ無意識的にせよ、「私が記憶を生きる」という次元での体験であっただろう。連想記憶を探る場合は、想起された記憶をもとに、自身の内的世界に入っていくような体験であった。そして、記憶に人生の雛型を見出すような場合は、それを劇のように観察し、その構造を修正して新たな脚本を作成するような体験であった。

このように、「私」が主語となって記憶を体験することができる一方で、「私」の意図を超えた形で記憶が作用するような現象がみられるのも事実である。すなわち、「記憶が我々を生きる」という観点から記憶体験を検討することも必要なのではないだろうか。まず、それがどのような体験であるかを見ていくために、日常場面において最もそうした体験に近いと考えられるブルースト現象について紹介し、その後、臨床場面で問題となるフラッシュバック、そして転移現象について見ていきたい。

### 1) ブルースト現象

ブルーストの小説『失われた時を求めて (Proust, 1913)』の中で、「主人公が紅茶に浸したマドレーヌを口に運んだ瞬間、異様な快感に襲われ、長い間忘れられていた幼少期の記憶が鮮やかに

<sup>5</sup> 日本心理臨床学会第25回大会 招聘講演「Adlerian Therapy Now (Carlson, J. 2006)」にて

蘇った」というエピソードが描かれている。この一節に由来し、何らかのにおいをかいで過去の記憶が呼び起こされる現象は、一般にプルースト現象と呼ばれている。この現象は、意図せず過去の状況へとタイムスリップさせられるような体験であり、デジャブ (Deja Vu) との関連もみられる不思議な感覚をもたらす体験でもある (森田、2008b)。

これは、「思い出そう」という意図をもった想起とは異なり、記憶の側が自律的に我々の側にやってくるような次元での想起の一つの例と言えるであろう。

## 2) フラッシュバック

西澤 (1997) によると、フラッシュバックとはPTSDにおける一症状であり、「一瞬にして過去の体験へと戻されること、つまりその体験が今の自分に降りかかっていると感じ、反応してしまう現象」であるという。つまり、想起主体が受動的体験として、「過去の体験へと戻される」ような事態がそこでは起こっている。そして、一度外傷記憶が想起されると、想起者は「なすすべもなく自動的に引き出される一連の記憶塊に圧倒されて」しまい (前田・土生川、2006)、それらは「ナラティブな形ではなく、身体感覺的再体験として想起 (Van der Hart et al., 2005)」されるものである。つまり、想起者自身の意図がどうあれ、その記憶は瞬時に押し寄せ、外傷体験時に連れ戻す。しかも、それは「記憶映像の過剰な豊富さを減圧する」という言語的な (ナラティブな) 枠組みでは捉えられない体験でもあり (中井、2004)、そうした外傷記憶は通常の記憶のように「文脈組織体の中に組み込まれない」ものである。

このようにフラッシュバックとは、「私」による統合・制御を超え、「記憶」が主体となって私を生きる例の最も強烈な一つと言える。

## 3) 転移

転移とは、過去の重要な他者との対人関係を、無意識のうちに現在の対人関係 (主に心理臨床家) との間で繰り返し再現する現象をいう。Freud(1905)は転移について、「過去の精神的な体験のすべてはけっして過去に属するものになるのではなく、医師という人間との現実的な関係としてふたたび活動しはじめる (傍点筆者)」と述べており、これもまた一種の「記憶が生きる」という現象といえるかもしれない。

## 4) 記憶の自律性

上に挙げたような現象はそれぞれ、「私」という「想起主体」による「産物」としての記憶ではない。いずれも、記憶の側に能動性があり、自律的に「私」を生きているということができる。多くの心理臨床理論では、極論を言えば、このような自律的な現象も最終的には「私」に従属させるような方向へと働きかけられることが目指されている。フラッシュバックはそれを新たな文脈で捉えなおすことで (Kamsler, 1990)、転移はそれに対して徹底操作をすることで (Freud, 1914)、それぞれ「私 (あるいはIch)」の統制下に置こうとする。

これらは、第1章で述べたような、私による「産物」として記憶を捉えることを重視する心理臨床独特の観点ゆえに生じる動機付けであろう。支配することができない自律的な記憶を、「私」の「産物」として捉えなおすことで、統制下に置くことを目指すのである。

しかし、実際の臨床場面では、このような観点からのアプローチではどうしても限界が感じられるような事例にしばしば遭遇する (少なくとも筆者の臨床的実感では間違いなく存在している)。記憶の自律性を考慮したとき、「私」がすべてを統制すべきという観点とは別の次元から考える

ことはできないだろうか。次章では、「私」と「記憶」との新たな次元での関係性を探ってみたい。

## 第4章 「私」と「記憶」、記憶」と「私」との対話

さて、序章で述べたような前提、すなわち心理臨床場面においては、記憶をめぐる様々なやりとりが行われる、という前提に戻って考えてみたい。そのとき、クライアント自身が過去の記憶を振り返りながらそれについて語るときもあれば、意図的に振り返らずとも、記憶が自律的に今現在を生きているような状態になることもある（前者は「記憶を生きる」体験、後者は「記憶が生きる」体験として前章で述べてきた）。これらはともに、いずれかが「主語」となり、いずれかが「目的語」となるような二分法的な観点から捉えられている。

一方で、まったく違った観点から捉えられることもできよう。たとえば、河合（2000）は心的外傷に関する論文の中で、ユングの自伝的エピソードを引用したうえで、外傷体験では、「魂によるファンタジー」が「さまざまな現実的出来事を自分のファンタジーのために利用し、組み入れる」ということが第一に起こっている、としている。この観点は、「魂」というまったく別次元の概念が導入されており、非常に興味深い。本章では、この「魂」という観点を組み入れて、試論を述べていきたい。なお、ここではHillman(1983)が述べているような、「人間を内包しているメタファー」であり、「実体よりもむしろ観点」として、この「魂 soul」という概念を用いたい<sup>6</sup>。つまり、これまで見てきた観点と比して、よりイマジナティヴな観点から「私」と「記憶」について捉えたい。

さて、現在の経験として想起された「産物」が記憶であるという見方が心理臨床における独特のものである、とこれまで論じてきた。このとき、「記憶」とは「私」が生み出したものとして捉えられているという前提が存在している。しかし、「魂」という観点を導入すれば、それとは違った前提となる。すなわち、「魂」が主語となるのである。魂が「記憶」を産み出し、さらに、想起する主体としての「私」も、魂が産出したものとしてみなされる。つまり、魂によって作られた産物としての記憶を、魂の産物である私が想起している、という観点をもたれることになる。

魂という観点から捉えれば、「私」も「記憶」も明確に区分されるものではない。そして、「記憶」は「私」に従属するものでもなく、「私」は「記憶」に縛られているものでもない。

このように考えたとき、臨床場面ではどのようなことが起こっているといえるだろうか。「私」と「記憶」がともに主体であり、かつ客体であるという二重性の中で、それらが対話を重ねていくというプロセスがそこでは行なわれている、といえるであろう。そして、対話を重ねていく中で、それぞれが変容の道をたどってゆくのである。「私」が「記憶」を変えるのではなく、また、「記憶」が「私」を変えるのではない。それぞれがともに変容してゆくプロセスが心理療法のプロセスではないだろうか。

心理臨床家の役割は、そうした対話を行なう場を提供することにある、と筆者は考える。日常、「私」という主体がすべてを操作しているように認識している（むしろ、何かに操作されている

<sup>6</sup> 魂は「あらゆる定義に抗する意図的に曖昧な概念である」とHillman(1983)が述べているように、ここでもこれ以上の定義は意図的に行わない。

と積極的に感じていては社会的に適応することは難しい)。心理臨床の場において、魂という観点に開かれた心理臨床家に抱えられた環境の中で初めて、私という主体はそのような「操作」という労働から解放され、自身の記憶と向き合うことができる。それは同時に、記憶が私に話しかけることができるともいえるのである。

このような魂という次元から捉えるという観点は、心理臨床場面において従来の前提ではどうしても限界が感じられたときに、ひとつのスタンスとなりうるのではないだろうか。

## 終章 結びと今後の課題

本論文では、心理臨床において記憶はどのような観点で扱われているのか、ということを認知心理学の研究や心理臨床から生まれた理論（主にFreudとAdler）を手がかりに検討してきた。そして、心理臨床では一般的に、記憶とは私という主体によって想起されたものであるという、産物としての記憶をいかに私が体験していくのかということが重視されている、と概観した。一方で、記憶のもつ自律性に着目したとき、そのような「私」の支配下に置くのとは別の観点から捉えることができるのではないかと思われた。そして、魂という新たな次元での観点を導入すると、「私」と「記憶」のいずれも互いに従属し合うものではないという見方ができ、それらの対話によって両者がともに変容していくのではないか、という試論を述べ、従来の前提では限界を感じるような事例において、ひとつの観点として持つことができるのではないかと提示した。

本論文では、「記憶」という現象のみに焦点をあてるべく、「イメージ」や「夢」などの概念は意図的に使わないようにしてきたが、記憶とそれらの概念とは切り離し難く、互いに関連しあったものであると思われる。特に「夢」は、Hillmanをはじめとする元型的心理学において「魂」という観点から論じられており、今後「記憶」と「夢」との関係について検討することで、第4章で述べた試論についても、さらに視野が広がると思われる。

## 引用文献

- Adler, A. 1929 *The Science of Living*. (岸見一郎(訳) 1996 個人心理学講義—生きることの科学 一光社)
- Adler, A. 1932 *What Life Should Mean to You*. Republished 1971 London : Unwin Books.
- Berntsen, D. 1996 Involuntary Autobiographical Memories. *Applied Cognitive Psychology*, 10, 434-454.
- Freud, S. 1899 *Über Deckerinnerungen*. (小此木啓吾 (訳) 1970 隠蔽記憶について フロイト著作集第6巻 人文書院 18-35.)
- Freud, S. 1901 *Zur Psychopathologie des Alltagslebens*. (池見西次郎・高橋義孝 (訳) 1970 日常生活の精神病理学 フロイト著作集第4巻 人文書院 42-49.)
- Freud, S. 1905 *Bruchstück Einer Hysterie-Analyse Fragment of an Analysis of a Case of Hysteria*. (細木照敏・飯田真 (訳) 1969 あるヒステリー分析の断片 フロイト著作集

第5巻 人文書院 276-366.)

- Freud, S. 1914 *Erinnern, Wiederholen und Durcharbeiten*. (小此木啓吾(訳) 1970 想起、反復、徹底操作 フロイト著作集第6巻 人文書院 49-58.)
- 原聰2006 この人に間違いありません 太田信夫(編) 記憶の心理学と現代社会 第V部第1章 有斐閣 209-220.
- Hester, R. L. 2004 Early Memory and Narrative Therapy. *Journal of Individual Psychology*, **60**, 338-347.
- Hillman, J. 1983 *Archetypal Psychology*. (河合俊雄(訳) 1993 元型的心理学 青土社)
- James, W. 1890 *The Principle of Psychology*. Republished: 1950 Dover Publications, Inc. New York. 643.
- Jung, C. G. 1987 *Kinderträume*. (氏原寛(監訳) 1992 子どもの夢 I ユング・コレクション 8 人文書院)
- Kamsler, A. 1990 Her-story in the making: Therapy with women who were sexually abused in childhood. In M. Durrant & C.White (Eds.), *Ideas for therapy with sexual abuse*. Adelaide: Dulwich Centre. 9-35.
- 河合俊雄 2000 心的外傷理論の批判的検討 河合隼雄・空井健三・山中康裕(編) 心的外傷の臨床 臨床心理学体系第17巻 第II章 金子書房 23-56
- Kopp, R. & Eckstein, D. 2004 Using Early Memory Metaphors and Client-Generated Metaphors in Adlerian Therapy. *Journal of Individual Psychology*, **60**, 163-174.
- 前田正治・土生川光成 2006 PTSDと悪夢—夢の「エピソード記憶化」現象について— ころの科学, 129, 35-42.
- Manzoor, A. and Ghazala, R. 2003 Early Recollections and Personality Characteristics of Pakistani College Students. *Journal of Individual Psychology*, **59**, 176-186.
- 松島恵介 2002 記憶の持続 自己の持続 金子書房
- 森田健一 2008a 幼児期記憶とその連想記憶における想起視点 京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 412-423.
- 森田健一 2008b 主観的体験から捉えたブルースト現象 日本味と匂学会誌, 15, 53-60.
- 中井久夫 2004 徴候・記憶・外傷 みすず書房
- 西澤哲 1997 子どものトラウマ 講談社現代新書
- 野村晴夫 2008 自己を語ることに想起すること —心理療法場面を手掛かりとしたその機能連関の探索— 心理学評論, **51**, 99-113.
- 太田信夫 1994 環境に埋め込まれた記憶 教育と医学, **42**, 49-53.
- 大森荘蔵 1999 時間と自我 大森荘蔵著作集 第八巻 岩波書店 3-196.
- Proust, M. 1913 *Du côté de chez Swan*. (鈴木道彦(訳) 1996 スワン家の方へ 失われた時を求めて1 集英社)
- 佐藤浩一・野村信威・遠藤由美・太田信夫・越智啓太・下島裕美 2006 自伝的記憶研究の理論と方法(3) 日本認知科学会テクニカルレポート, **57**, 1.
- Van der Hart, O., Bolt, H., & Van der Kolk, B. A. 2005 Memory Fragmentation in

森田：記憶に関する心理臨床的観点についての一考察

Dissociative Identity Disorder. *Journal of Trauma & Dissociation*, 6, 55-70.

備考) 本研究は、文部科学省グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」の支援を受けた。

謝辞) 日頃よりご指導いただいている桑原知子先生、また常に試論を叩き合っている同僚に謝意を述べたい。

(心理臨床学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月1日、受理2008年12月11日)

## Perspectives on Memory in Clinical Psychology

MORITA Kenichi

Although memory is a core concept in psychotherapy, there are few ideas for memory in that context. This paper focuses on memory perspectives in clinical psychology, reviewing theories of memory produced by clinical psychologists and presenting a new perspective on them. In clinical psychology, the characteristics of memory, such as the production of subject and the changeability, are considered to be important, and what the memory means is pursued. Surveying the techniques of theories proposed by Freud and Adler, "to live the memory" seems to be the most significant experience. Meanwhile, some phenomena seem to indicate that "memory lives me," such as flashback experience and transference. The traditional approach to such phenomena is to control the memory by "me" and to relive the memory in a new context. But this sometimes seems difficult. When the perspective of "soul" is introduced, both "I" and "Memory" would be products of soul. In this paradigm the dialogue between "I" and "Memory" is important in psychotherapy, and through development of the dialogue, both "I" and "Memory" would be transfigured. This new paradigm could be one perspective when the therapy becomes difficult based on the previous perspectives.